

1996年 エディンバラ学会から

馬淵 清彦
放射線影響研究所疫学部

1996年の第30回 IACR (International Association of Cancer Registries) 学会は、*世界のがん登録の発展に偉大な努力を傾けた故 Calum Muir 氏の本拠地スコットランドのエディンバラ市で、英国がん登録協会の主催のもとに、9月3日から5日まで開かれた。そそり立つ中世の城と、昔ながらの狭い街並みではあるが、モダンで洗練された店の立ち並ぶプリンセス・ストリートとが調和よく共存するエディンバラの町は、ヨーロッパでも人気の高い観光地である。会場は歴史的な Royal College of Physicians の小さな建物で、ここに200人を超える参加者が集まった。*

主題である **Survival** について6つのセッションが持たれ、*生存データの比較性、変動、経時変化、社会人種分布、追跡方法、及び開発途上地域における生存データなど、焦点を絞ったよい企画であった。特に英国、ヨーロッパからの若い研究者による活発な発表と討議が印象的で、将来への期待をうかがわせるものであった。Calum Muir 記念講演では、英国 Chief Medical Officer の Sir. Kenneth Calman が、「がんと科学、社会」と題して、リスクの概念を社会に普及させることが如何に重要であるか、説得力のある講演をした。我国からは6人出席し、口演1(花井氏)、ポスター4(味木、藤田、岡本、田中各氏)を発表したが、将来はさらに積極的な参加が望まれるところであろう。*

IACR 理事会が、学会に先立ち、エディンバラから北へ約2時間、ハイランド地域の小さな町、ピククロリーで開かれた。事前の選挙で、理事会のメンバーが新しくなっていた。President は John Young 氏に、General Secretary は花井彩氏からデンマークの Hans Storm 氏に、さらに各地域代表として、Cherif (アフリカ)、West (米国)、Pompe-Kim (ヨーロッパ)、Nandakumar (アジア)、Roder (オセアニア) が加わった。私をはじめ、一部の旧メンバーには、1997年の理事会が最後の理事会となる。

総会では新たな名誉会員に、フランスの Tulinius 氏らとともに、日本から花井彩氏を選ばれた。

1998年の学会は米国アトランタで、1999年にはリスボンで、2000年には中国かタイで、また2001年には南アメリカで、それぞれ開催の予定である。

1997年 国際がん登録学会に出席して

岡本 直幸
神奈川県立がんセンター

西アフリカのコート・ドゥ・ボワールの首都アビジャン市から東へ約40kmのリゾート地グラン・バッサムで、1997年国際がん登録学会が11月3日から5日まで、行われました。約35ヶ国から200人余の参加がありました。

本年度のメイン・テーマは**感染症とがん登録**で、口演62題、ポスター21題が報告されました。日本からの出席は千葉の村田先生、愛知の井上先生、私の3名で、大阪の味木先生が急遽不参加のまま報告されることになったのを含め、ポスターで4題を報告しました。開催地がアフリカのため、「感染症とがん登録」が主題となったのですが、演題のほとんどは、がん登録の意義、手法、システムなどとは無関係で、国際感染症学会のような印象でした。実際、参加者には病理学者や臨床医が多く、私がこれまでに参加したオタワやエディンバラの学会とは、大分異なった雰囲気でした。

この学会のポスターセッションでは、毎年表彰があり、今回は味木先生のポスターが最高の栄誉を勝ち取られました。蛇足ながら参加した3人は、味木先生の賞状と副賞(民族木彫)を受け取り運ぶ役目(?)になってしまいました。

報告のなかでは、ガンビアからの演題が印象に残りました。WHOの支援のもとに、国を二分して1986年に一方の小児にHBVワクチンを投与し、その有効性を9年間追跡し、HBV感染予防やキャリアの防止を確認したものです。この The Gambia Hepatitis Intervention Study (GHIS) では、今後30年間追跡調査を継続するために、National Cancer Registration を発足させ、ワクチン接種群と未接種群でのHCC発生を観察しようとしています。この口演を聞いて、研究のスケールの大きさに感じ入るとともに、先進国ではほとんど不可能なスタディーであることや、WHOの支援姿勢や方向性について、改めて考えさせられました。

なお、もう一つ蛇足ながら、このような地域の学会への参加では、飲料水や虫ささおに十分な注意が必要です。今回は、幸い日本を含むアジア系の参加者は元気に帰国しましたが、ヨーロッパ系では、腹痛と嘔吐がとまらなかった参加者が何人かあったそうです。